「景観形成　反省と自戒」　山口県産業技術センター　水沼　信

地域景観ワークショップのお手伝いで県内各地を細かに巡った。
その中でふたつの大切なことに気づいた。
第一点は「のんびりできない」ということである。
深山の集落を訪れると、そこにはのどかな美しい景観を発見できる。
それは棚田であったり、里山であったり、町並みであったり、いろいろなのだが、共通して「人がいない」。
いわゆる限界集落である。
現状ではなんとか魅力的な景観を止めているが、近い将来まちがいなく消失してしまう危機感がそこにある。
この景観を守り育てるためにはどうすればいいか？
もちろんこれは大事なことであり、このことから地域景観ワークショップを実践している。
これはとても時間がかかる作業である。
しかし速やかに行わなければならないことは「記録」することであると痛感した。
無くなってしまっては一環の終わりである。
何はともあれ記録として残さなければならない。
第二点は「でしゃばりすぎるな」ということである。
景観資源調査で訪れた「祝島」についてネットで調べていると広島工業大学森保教授グループの活動を発見した。
教授らは祝島の集落調査を通して、その独特の景観資源である「練り塀」の重要性を探求している。
しかし教授らは「練り塀」の保存を島民に無理強いしない。
「練り塀は残さなければならないのだ！」と大上段に構えた物言いをしない。
島民が手をつけられず困っている「練り塀」の補修のお手伝いを学生らのボランティアで行っている。
小さくてもいい、できることからコツコツと地域の人と共に汗する、教授らのとりくみにハタと気づかされた。
私たちはあくまでも外部の専門家面をして、住民または地元行政を批判し責任を押しつけただけで自己満足していないか。